

船から見た呑川（その2）

前回のレポート（呑川レポート 2012-24）船から見た呑川・海老取川（海老取川序論その1）の続きです。

—————（海老取川・序論その2）—————

呑川河口から船はさかのぼりましたが、水深の浅い呑川ですので、「藤兵衛橋」でUターンして、こんどは「海老取川」を進みました。



「多摩川」との合流点で、「鈴木新田」を守る「水制工」カメノコを見つけ、そこで「五十間鼻無縁仏堂」にも出逢いました。そして、いよいよ船は「多摩川」に出たのです。



多摩川に入り、ふと「海老取川」の方を振り返ると、「穴守稻荷」の赤い「大鳥居」が見えます。
これが、いわくいんねん、諸説ふんぶんの「大鳥居」です。

「羽田漁師町」から分村した「鈴木新田」は、敗戦直後アメリカ軍が進駐し、ここをカマボコ兵舎など米軍用地に接收するからと、「穴守町」・「江戸見町」と共に、48時間以内の退去を命じられます。

この「鈴木新田」は「干拓」によって出来た土地で、将軍は「鷹狩り」を主にしていましたが、ここでは湿地を利用して「カモの猟場」として活用した場所です。

海に接したこの湿地帯は、穴が出来やすく、出来た穴から水は逃げ、また反対に、こんどはその穴から塩水が入ってくるという困難な環境にありました。

だからこそ、その穴からの被害を守る「穴守稻荷神社」をたてまつったのです。

米軍が接收した時は、たくさんの鳥居がありましたが、「大鳥居」を残したのは、「壊したら、たたりが来ることを恐れ、実際にも不幸なことが起き、さしもの米軍も大鳥居には手が付けられなかった」と、日本の神の力を誇示する説が有力なようです。

しかし、「我々は日本を占領し、あなた方の神をも支配した」と、米軍の力を誇示するために残したという説もあります。

船が多摩川に入り、ここから見る「大鳥居」はいかにも立派で、堂々としていて、「さしもの米軍も手が付けられなかった」という説が正しいようにも見えます。

しかし、多摩川側からこの鳥居を見ることは、漁業者は別として、ほとんどの人は無かったといえます。



「鈴木新田」が接收され、人々がそれを周りで見た時、鳥居はこんな風に見えたことでしょう。

まして当時は、米軍用地になり、フェンスに囲まれた鳥居を見たのです。

また、離発着の航路の都合上、現在はこの位置になりましたが、占領された当時はもう少し向こうにありました。

人々は、とらわれの身となった鳥居を見て、占領下の日本を強く感じたのではないのでしょうか・・・

あまり自分たちにとって都合の良い見方をしてはいけないのだと思います。

また「たたりがあった」等というおもしろおかしい話に乗ってもいけないと思います。

当時のアメリカは民衆心理学もよく勉強し、科学的な多様な手法で日本の占領政策を進めたと言います。

その頃の米軍の政策も解明され、アメリカ側で記録した写真がどこかにあるそうですが、それらをぜひ見たいと思っています。

さて、船は多摩川に入り、少し進むと、羽田空港の「D滑走路」が見えてきました。



なんと、「D滑走路」は、「多摩川」を進む我々を阻むかのようです。
これには本当にビックリしました。
私たち河川を愛好し、河川のことをいつも考えている者にとって、
信じられない光景です。

地図でその位置関係を見てみましょう。



これは google マップですが、黄色の文字は私が記入したものです。
多摩川の河口をドカンとふさぐように、「D滑走路」はあるのです。
太い川幅の多摩川が、「川崎」側と「D滑走路」との間の狭い隙間の出口に
なっているのです。

「呑川」では、とにかくサッと水を流し出すことが優先され、障害物の無い「3面コンクリート直立護岸」にされ、河道内に突起物を置くことは許されません。

何よりも洪水対策・治水対策が優先されるのです。

それが「多摩川」では、「D滑走路」という巨大な構造物がドンと置かれ、これで河口域に「洪水」が起きないのかと不思議になります。

しかし、少し近づくと、その疑問が解明されました。



天候が悪いのと、あまりにも船から遠いので、写真が汚くて申し訳ないのですが、「D滑走路」の写真を拡大して見ると、滑走路が「杭」で浮いているのが判ります。

つまり、多摩川の水の流れを阻害しないように、滑走路を「埋め立て」で作らず、「棧橋」形式で作っているのです。

飛行機という特別に重い重量物を、安定した滑走路で受け止めるために、「埋め立て」でない手法で実現するには、とても大きな技術的課題があったようですが、とにもかくにも、こういう構造を取らざるを得なかったようです。

「川」に関心を持つ者にとって、この「D滑走路」の持つ構造が、川の「流路抵抗」をどの程度下げなのか、とても気になります。



「D滑走路」を見ていると、滑走路の直上を埋め尽くすように、おびただしい数の鳥が集まっているのが判ります。

これでは、ジェット機の「バードストライク」が気になります。
現代の「ジェット機」は、「プロペラ機」と違って、「エアインテーク」（空気取り入れ口）がありますから、ここに野鳥が吸い込まれ、墜落の危険性さえ起こすのです。



ちょうど、「D滑走路」にジェット機がやって来ました。
どうなるかと固唾を呑んで見ていましたら、ほとんどの鳥は逃げていきました。
これはジェット機の爆音のせいもありますが、バードストライク対策で、鳥の嫌がる超音波を、離着陸時に発生させていることにも依るようです。

さて、ここで船は引き返し。「多摩川」から再び「海老取川」に向かいます。



ところが、こちらの船が「海老取川」に向かおうとする時、反対に「海老取川」の方から、こちらに向かってくる船（右側の白い船）に出逢ったのです。

（黄色い船は停船中です。）

狭い「海老取川」では、すれ違い航行はとても危険です。

すると・・・



ここに「警戒船」が停泊して、我々に航行の指示を与えます。

その指示に従い、白い船が多摩川に出てから、私たちの船は「海老取川」に進んだのです。

こうして「警戒船」の役割と重要さを、実際に体験することが出来ました。

ここで、「海老取川」の役割や、「呑川」との関係について触れておきたいと思います。

「滞すじ（みおすじ）」に過ぎなかった小さな水の流れが、「干拓」によって開発された時以来、「海老取川」となったこの川は、「羽田漁師町」と「大森」を結ぶ重要な水運通路となり、賑わったそうです。

しかし、ここでの漁業が「漁業権放棄」などでお終いになった今も、ここでの「船運」が見られるのはどうしてでしょう・・・？
この背景を探りたくなります・・・



私たちが乗った船は、内川河口部から出発しました。
でも、ここでの船の係留は多くはありません。
ここからの船運は、とても少ないものと思われます。

2年ほど前、私はとても関心があって、呑川河口の係留の実態を調べに行ったことがあります。



これはその時の一つ、「海老取川」方面からやって来て、急にカーブして「呑川河口」に向かう小型船を目撃しました。



私は、それに「どんな人が乗り、どんな漁具を積み、どこに停泊するか」を追い、カメラで撮影をします。

相手はそれをとても嫌がり、船の進行方向を見ないで、私をにらみつけるようにこちらを見続けます。

とても気まずい雰囲気というか、陰悪な雰囲気ただよいます。

やはり「不法係留」のうしろめたさが、そういう態度に出るのでしょうか・・・



こうして、「呑川河口」は、とても大きな船だまりが形成されています。

昔は「羽田漁師町」と「大森」を結ぶ、大切な船運の場所だった「海老取川」・・・それが現在は、役割を大きく変え、呑川の「船だまり」と、「多摩川」や「多摩川沖の東京湾」を結ぶ「遊漁船」や「レジャーボート」の通路になっているのです。

まさに「呑川」という船の一大「係留地」があるからこそ、「海老取川」が「船運」としての要衝になっているのです。

つまり「呑川河口部」と「海老取川」とは一体になって機能しているのです。いずれにせよ、「海老取川」は、「滞すじ」だった時代から現代に至るまで、この地域の人々に時代を超えて活用され、大切にされてきたのだと思います。

そして、我々の乗る船が「海老取川」を戻っていく途中で、この地域の人々の姿をかいま見るチャンスに出逢いました。



「海老取川」の護岸に座り、なにか作業をしています。
たくさんのバケツとクールボックス・・・そうです、「ゴカイ」取りの作業です。
海老取川周辺では、遊漁船の業者の他に、釣具店なども並び、どこでも釣りの生きエサを提供しています。
「ゴカイ」など、こういう生きエサは、今は一部では養殖もしているようですが、やはり基本は「干潟」から採取します。



この業者が座り込む環境を見てみましょう。
「海老取川」の護岸をよく見てみると、貝類がいっぱい付いているのが見え、今は「干潮」であるのが判ります。

そこで、護岸側の河床に注目すると、「干潟」が出ているのが見えています。

この干潟は「泥干潟」でしょうか、それとも「砂干潟」でしょうか・・・
いずれにせよ砂の「粒径」が小さければ、ゴカイはたくさん棲んでいるもの
と思われます。

業者の方は、この干潟に降りて「ゴカイ」や「アナジャコ」などを採取して
いるのでしょう。

そして座り込んでいる場所から、階段と手すりが見え、堤外に出入りできる
施設がちゃんと整備されているのが判ります。

こうして、作業をしている人々や、道具、河床の干潟などの様子、川堤の構造
などを、キチンと観察すると、「海老取川」と人々の関係や暮らし、さらに、
この地域の人々の営業や生活まで浮かび上がってくるのです。

「海老取川」では、この地域の人々の暮らしに密着した環境が整えられて
いるのを感じます。

厳密に法規制上から言えば、これらは許されないことかもしれません。

また、前回のレポートで紹介した「五十間鼻無縁仏堂」などのように、
河川の中に「お堂」などの構造物を作ることは許されないでしょう。

しかし、地域の人々に密着した配慮がなされているからこそ、「地域の人に
愛される河川」として生き続けているのだと思います。

こういう視点で川を見た時、我が「呑川」はいったいどうなのだろうと、
考え込んでしまうのです。



これはあらためて、上の写真と同じものですが、同じ写真でも別の視点から

見ると、特別の「歴史的意味」や、「海老取川」の由来が浮かび上がってきます。

この時間帯は、干潮時にあたり、水が大きく減り、干潟が露出している状態にかかわらず、我々の船は「海老取川」を「呑川」方面に航行して帰って行ったのです。

これを目の当たりにした時、私は思わず「あっ！」と感嘆の声を上げました。まさに、これが「海老取川」が「滞すじ」だった証拠であり、干潮時も川の中心部は水の流れ（上の写真に見られる下側）がわずかでもあって、そこを我々は航行出来たのです。

はからずも昔、「海苔取り」や「貝取り」「えび取り」をした船が、干潮時にわずかに残った水の流れ・・・つまり「滞すじ」を伝って帰ったように、私たちも、昔の状況と同じように、こうして帰って行ったのは、ただただ胸に迫る大きな感動でした。

この時、誰かから「あの鳥は何という鳥ですか？」と聞かれたような気がしましたが、私は感極まっていた、それにはお答えできませんでした。後から振り返ってみると「あの鳥、いったい何なのだろう？」と、いぶかられたかもしれません。申し訳なかったと思います。

さて、船は「海老取川」を通り抜け、「海老取運河」を進み、また「昭和島」の脇を通過して「内川河口」に戻ります。



途中「鼻の先干潟」ではおびただしい数のセグロカモメに出逢いました。生きものたちにとって「干潟」はオアシスであることを、肌身で実感する光景

でした。

わずか1時間半足らずでしたが、船による今回の観察は、私にとって貴重なものとなりました。

報告したいことは、この2倍も3倍もありました。

でも、この行事は今年の2月に行われたので、多くのことを忘れ、年齢のせいもあるのですが、思い出せないことが多く、このレポートを書きながら我ながら悔しい思いをしました。

ただ、呑川にとって、その河口部にある「海老取川」については、もっときちんとレポートしたいと思っています。

ただ、今それを書くとき、本や文献に頼りがちになるので、それはそれで皆さんに個々にやっていただくとして、私はそれよりも実地を踏査して解明したい、なるべく写真に収めて報告したい、「実証的研究」を何よりも大切にしたいので、少し時間をいただきたいと思っています。

それで今回のレポートは「海老取川・本論」とせず、「海老取川・序論」とさせていただきます。

今週末に、再び行われる「船で呑川ウォッチング」が楽しみです。

(当面の日程)

2012/11/24(土) 船に乗って呑川ウォッチング 平和島駅 9:30

2012/12/6(木) 呑川ネット定例会 生活センター 10:00

2012/12/8(土) 呑川の会・定例会 蒲田小学校 14:00 終了後忘年会

2013/1/26(土)-27(日) 区民活動フォーラム(大田区役所・生活センター)

展示は2日間。呑川講座は1/27 10:30(1時間)

*この間に「呑川散策ガイド」作りはピークに達します。

——photo essay by——

高橋 光夫

〒145-0061 東京都大田区石川町 1-26-8

(tel) 03-3727-8419 (fax) 03-3727-8505

(mail) mitsuo.takahashi@nifty.com
